

第234回 令和8年5月22日（金）

### 「サーバントリーダーシップとは」

松下電器製作所を起業し、世界に通用する家電メーカーに成長させた松下幸之助は著書「道をひらく」に謙虚な心の大切さを説いています。

社長について「部下が100人いたら自分は101番目だと思える人間が社長をするべきである」と書いていますが、これは現代の「サーバント（奉仕する）リーダーシップ論」に通じています。当時社長と言え「俺の背中についてこい」というタイプがほとんどだったのに、この先見の明には驚かされます。

松下電器は苦境の時も社員を解雇することはなくとても大事にしていました。さすがに今はそうとばかりも言っていないのかもしれませんが、松下さんのころは社員を守ることを第1優先として徹底していました。

人間は苦境の時に「なぜ自分ばかり」とひねくれてしまったり、順風満帆の時に「自分だからできた」とうぬぼれてしまったりすることがあります。どちらの感情も社員にとってはあまり歓迎できるものではありません。

今起きている現実だけに目を向けて、感情に流されず、謙虚に社員のことを考えて経営をする姿勢が協力を生む。困った時にその協力体制が大きな力を発揮する。日ごろから社員を家族のように大事にしているからこそ、緊急時に一丸となることができる。

サーバントリーダーシップはいままでこそ当たり前ですが、当時は社長の威厳が何より求められた時代です。松下さんのようなリーダー論を掲げることは大きなリスクがありました。下手をすれば軍部ににらまれる可能性さえありましたが松下さんは主義主張を変えることはありませんでした。

私もサーバントリーダーシップは常に心がけていることです。校長職というのも順番で回ってきている役職です。自分が偉くなったわけでも優秀になったわけでもありません。常に謙虚さを失わないように気をつけているつもりです。

「老いては子に従え」と言いますが、年をとればやがて次の世代の人たちが社会の中心となります。順番に次のリーダーに育つ人たちにも謙虚さを失わずに役割を全うしていただきたいと思っています。そのときに少しでも参考になればという思いでいまはサーバントリーダーシップを実践しようと考えています。

「謙虚さ」はいつ、どこで、どのような立場になっても自分を支えてくれます。謙虚さを持っているれば困った時に協力してくれる人がきっと現れるはずですよ。